

こいむすめむかしはちじょう

## 恋娘昔八丈

### 〔解説〕

安永四年（一七七五）江戸外記座初演。松貫四、吉田角丸の合作。

江戸の町で実際に起こった夫殺しの事件を元に、お家騒動を絡ませています。歌舞伎、新内などにも同じ内容の作品があり、改作が多く生まれ「髪結新三」もその一つです。

### 〔あらすじ〕

萩原家の子息千草之助は吉原の十六夜という遊女に入れあげ、家宝の茶入れをお家乗っ取りを企てる一味に盗まれます。茶入れ探索のために家を出た家老の息子・才三郎の恋人お駒は、実家に戻って意にそわぬ結婚をしますが、夫となった喜蔵が茶入れを盗んだ一味とわかり、取り戻そうとして殺してしまいます。夫殺しの罪人として鈴ヶ森の刑場に引き出されたお駒ですが、処刑寸前、悪事の一味がとらえられ、お駒の赦免状が届きます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

## 鈴ヶ森の段

急ぎ行く。

人の身の捨てどころとや名にふりし、鈴ヶ森の仕置場所。  
青竹にて矢来を構へ、あたりにきらめく抜身の鎧、ければ  
ぬ役人馳せ違ひ、科人今やと待ちかけしは、この世からな  
る地獄の責め、忌はしくもまた恐ろし。

思ふ事叶はねばこそ憂き事の、恋と義理との諸手綱。不憫  
やお駒は夫のため、かゝる憂き身の縛り縄。首にかけたる  
水晶の、数珠の数さへ消えてゆく。屠所の羊の歩みより、  
はかなき身ぞと観念し、力なく／＼引かれ来る。代官堤弥つみや  
藤次お駒に向かひとらじ

「最前屋敷にて、役人中申し渡されしごとく、仔細ありと  
は云ひながら、かりにも夫を殺したる科は通れず。重き刑  
にも行なはるべきを、お上の御慈悲をもつて死罪に仰せつ

けらるゝ。ありがたく存じ奉れ」

と云ひ渡せば顔を上げ

「なに事もみな私が心でかゝる身の罪科、露いささかもお  
上へ対しお恨みはござりませぬ。ありがとう存じます」

と覺悟極めし健気さに不憫と見やる諸役人、涙紛らすばか  
りなり。お駒は顔を振りあげて

「御見物様、いづれも様、夫を殺す大罪人。さぞ憎いやつ  
大胆者、いたづら者と皆様、お憎しみもあるふけれど、  
云ふに云はれぬ訳あつて、夫殺しの科人と、死恥さらす身  
の因果、不憫とおぼし一遍の、御回向願ひ上げます。世  
上の娘御様がたは、この駒を見せしめと、親の赦さぬいた  
づらなど、必ず／＼遊ばすなエ。可愛い夫へ義理立てば、

二親に嘆きをかけ、また親々へ従へば、いひ交はした夫へ  
立たず、果てはかうしたあさましいこの世からなる剣の山、  
身を切り裂かれ憂き恥を、さらすも定まる因縁づく、約束

事と諦めても、二世の契りのその人と、一世と限る二親の、  
もしや群集のその中に見えはせぬか」

と伸び上がりく／＼でも竹垣の透間がくれの人群れに、目も  
泣きはれて見え分かぬ心を思ひ諸見物、濡れぬ袂はなかり  
けり。

折もこそあれ才三郎。丈八に縄をかけ、群集押し分け矢来  
のうち

「御預けの茶入れの盗賊喜蔵に紛れなき由、この丈八が白  
状ゆゑ再び茶入れもわが手に入る。また喜蔵、丈八兩人は  
この才三郎が親の敵。お上へ委細申し上げ、お駒が命赦免  
の状、御披見あれ」

と差し出せば弥藤次取つて押しひらき

「成程々々紛れもなき赦しの趣き。親の敵とあるからは喜  
蔵丈八兩人は才三郎の心任せ。お駒はすぐに二親へ、御赦  
免なるぞ」

とありければ『はつ』とばかりに庄兵衛夫婦。夢に夢見し  
心地して、よろこび涙ぞ道理なり。お駒が縄目とく／＼と、  
解けて結びし恋娘。千代も変はらぬ御恵み、重ね／＼て黄  
八丈。昔語りを今こに、伝へ／＼し筆の跡。世々に伝へ  
て語り草。

ゆらのみなとせんげんちようじゃ

## 由良湊千軒長者

### 〔解説〕

宝暦十一年（一七六一）大坂竹本座にて初演。近松半二、三好松洛らの合作による初・中・後三巻の時代物です。説教節「さんせう太夫」などにはじまる「山椒大夫物」の一つですが、物語全体の展開は安寿と厨子王（この作品では対王丸）の悲劇というよりお家騒動物の色合いが強く、説教節などとはかなり異なっています。歌舞伎化もされ、一時期人気を得ましたが、現在では上演もなくなり、文楽でも中の巻の一部の姉弟の苦難の部分を再構成した「山別れの段」が稀に上演されるのみとなっています。

### 〔全体のあらすじ〕

父である岩木判官を策略によって失った安寿と対王丸は、母親らと共に人買いに掠われ、母は佐渡へ、姉弟は丹後の由良で三莊太夫に売り渡されてしまいます。辛い労働を強いられる二人でしたが、元家臣であった元吉要之助によって救われ、父の仇を討ち、生き別れた母を探しだし再会を果たすのでした。

「山別れの段」 山での柴刈り、浜での汐汲みの重労働を強いられる安寿と対王丸は、身の不幸を嘆きながらもお互いを思いやって暮らしていました。その境遇のあまりの辛さに対王丸は自害しようとしています。姉の安寿はそれをなんとか押しとどめ、二人は山へ浜へと涙ながらに別れて行きます。

# 山別れの段

ゆたかなり。

歌人の三十一文字の種となる、由良の湊の風景は、筆に及ばぬ眺めとて、まだとけやらぬ谷のとの、雪をさそえる鶯の、声を春にぞ迎へける。

「申し姉様、今日は猶しもお顔のやつれ、お心悪ふはござりませぬか。父様にも母様にも、お前一人を力草。煩ふてばしくださんすな」

と、くどけば姉もうちしほれ、

「ヲ、姉弟なりやこそその様に、姉を大事にかけてたもる。コレよふ聞きや。毎夜／＼の折檻が、病にならいで何とせう。奥州五十四郡の主、判官様の忘れといわるゝ、浮世をしのお忘れ草と、賤しい業の奉公。毎日／＼三荷の汐柴、昨日は賤に助けられ、教を合わせし夕べのしぎ。今日は誰

が助けてくれふ。サア山へ行きや、わしも一緒に柴刈らふ。

サアサアおじゃ」

と先に立ち、行けば袂に取りすがり、

「コレ姉様わしと山へいて、お前の汐は誰が汲みます。人に汲んで貰ふてさへ、打ち打擲の棒さんまい。辛い苦しい艱難も、姉弟一緒に居ればこそ、辛抱もなります。ひよつとお前の身の上に、もしもの事があつたらば、わしや何とせうどふせうぞ。サア浜へお出であそばせ、私もともども汐汲まう」

「ヲ、よふ云ふてたもつたのふ。自らは女子の事、そもじは大事の殿御の子。姉にかまはず山へ行きや」

「イエ／＼わたしが」

「イヤわしが」

と、争ふ思い血筋の親身。泣く／＼しぼる袖袂。対王丸は鎌追つ取り、自害と見るより取り縋り、

「氣が違ふたかコレ弟、何故死ぬる」

ともぎ放す、その手を取つて、

「コレ姉様、何故死ぬとは聞こえませぬ。お乳や乳人にかしずかれたる姉弟が、今は寒夜の、賤しい土民に踏まれたりたたかれたり、口惜しいとも無念なども、名字の汚れ我が身の恥。姉様止めずとどうぞ死なしてたべ。」

「ヲ、道理じゃ、尤もじやはいのふ。扇の橋憂き難儀、力と頼む要もちりく、跡は足弱追手の危ふき、救ふてくれ

ると思ひの外、姉弟のみか母様まで、人買に売り渡され、

有らふ事が有るまい事か、世にも稀なるこの里の、三莊太

夫が胸欲心、売り渡されし悲しさつらさ。おいとしや母様

は、いづくにござるか知らねども、朝夕も二人が事、思ひ

暮らし泣き暮らし、さぞ懐かしう思ふてござろ。コレ親子

は一世、死んで未来で逢はるれば、つれない命生きては居

ぬ」

と、くどき立つれば弟は、

「なんぼ逢はふと思ふても、どこを尋ぬる焦土もなし。ましてお弱い生まれ付き、涙の種が病となり、もしもお隠れなされたら、生きて甲斐なき世の中に、死ぬにも死なれぬ姉弟を、神や仏もこれ程まで、見捨て給ふか恨めしや」と、互いにひつしと抱き付き、前後正体泣き沈む、心ぞ思ひやられたり。

「いつまで云ふても返らぬ繰り言、遅ふては又難儀。そなたも山で柴仕事、姉も浜へ行きます。必ず、必ず怪我せぬ様にしてたもや」

「そんならお前も怪我せぬ様に頼む」

頼むも泣き別れ、別れが辻を右左、一足いては立ち止まり、坂へかゝれば

「コレ対王、まだ四方山に残る雪、手足も凍へてたまるまい。必ず木の根につまづいて、谷へ落ちてたもんなや」

と、云ふも次第に遠ざかり、

「ヲ、イ〜」

とが、同じ思ひの引く足にの、

「姉様汐に誘はれて、流れてばし給はるな」

と、影身ゆるまで伸び上がり、呼べど答へも山彦の、音は  
こだまか松の風、拭き払ひ行く汐衣、姿隔つる春霞。涙な  
がらにたどり行く。

けいせいこいびきやく

## 傾城恋飛脚

〔解説〕 安永二年（一七七三）豊竹比吉座初演。近松門左衛門の「冥途の飛脚」を菅專助・若竹笛躬らが改作。梅川忠兵衛の哀れと、その父孫右衛門の情愛がしんみりと描かれた下の巻「新口村」が現在でもたびたび上演され、近松原作の「封印切」の後にこの段が上演される事もあります。歌舞伎の「恋飛脚大和往来」にも取り入れられ、浄瑠璃でもこの外題が使用される事もあります。

〔あらすじ〕 飛御座亀屋の養子忠兵衛が恋仲の遊女梅川の身請の手付金として、恋敵の八右衛門の為替金を流用したことから、忠兵衛の許婚「おすは」は我が身を犠牲にして金を盗み出そうとしたり、梅川の父と兄は芝居を打ってまで金を作ろうと画策します。一方、亀屋の分家和平は八右衛門と組み、忠兵衛に罪を着せ更に毒殺しようと企てますが、逆に自分の罪がばれてしまいます。八右衛門は梅川の身請金を持って来ますが、梅川と忠兵衛の事情を聞いている親方は受け取ろうとしません。忠兵衛はたまりかねて持ち合わせていた三百両の封を切り梅川を身請します。喜ぶ梅川に、実はその金は公金であった事を打明け、覚悟を決めた二人は大和へと落ちて行きます。

〔新口村の段〕 忠兵衛の故郷新口付に着いた二人は、道場帰りの人の中に親孫右衛門を見つけますが、世の義理から出ていくことができません。梅川は雪道で転んだ孫右衛門を介抱し、それとなく名乗ります。養子親への義理を立て、目隠しをして忠兵衛に会った孫右衛門は二人に金を与えて逃してやるのでした。



## 新口村の段

孫右衛門は老足の、休み／＼門を過ぎ、野口の溝の薄氷、滑るをとまる高足駄。鼻緒は切れて横さまに、どふと転べば『南無三』と、忠兵衛もがけど出られぬ身、梅川慌て走り出で、抱き起しつ裾絞り、

「申し／＼、どこも痛みは致しませぬかへ。お年寄の危ないこと、オゝマ危ないこと。お足も洗ひ、鼻緒もすぐて上げませふ。マア／＼こちへ」

と手を引いて、うちへ伴ひ上り口、腰膝撫でて労はれば、孫右衛門は氣の毒さ

「ア、戴きます／＼。どなたか知らぬが忝ない。お蔭で怪我も致しませなんだ。ア、若い女中のおやさしい。年寄りと思し召して、嫁子もならぬ御介抱、も／＼手を洗はしやつて下さりませ、ハテマア手を洗はしやつて下

さりませ。辛ひ庭に藁は沢山、鼻緒はわしがすぐえます」と懷搜して取り出す塵紙。

「ア、申し、こゝによい紙がござんす。こより捻つてあげましよ」

と延紙引き裂くその手元、不思議そふに打守り

「こゝら辺りに見馴れぬ女中。マアこなさんはどなたなれば、このやうに懇ろにして下さります」

と、顔つれづれと眺むれば、梅川いと胸つぼらしく、

「ハイわたしは、旅の者。わたしが舅の親父様、丁度お前の年配で、恰好も生写し。他の人にする奉公とは、さ／＼もつて存じませぬ。お年寄つた舅御の、臥し悩みの抱きかゝへ、孝行は嫁の役。御用に立つて嬉しいもの。さぞ連合ひは飛び立つ、サア飛び立つやうにござりましよ。その紙とこの紙と替へてわたしが申し請け、連合ひの肌につけさせて、父御に似た親父様の形見にさせたふ

ござんす」

と塵紙袖に押包む、涙にそれとは知られけり。詞の端に孫右衛門、『さてはそふか』と恩愛の、尽きぬ涙を押し隠し、

「フウこなたの舅にこの親父が似たといふての孝行か。エ、嬉しうござる。ガ腹が立ちますはい。わしも年たけた倅めを、様子あつて久離切り、大坂へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を盗んだとやら、あづくに所を走つた噂。この大和は生国なれば、十七軒の飛脚屋仲間、お上からも隠し目付、あるひは巡礼古手買ひ、節季候にまで身をやつし、この在所はモウく詮議最中。誰ゆゑなれば、その傾城の嫁御ゆゑ。近頃愚痴なことなれど、世のたとへにも言ふとほり、盗みする子は憎ふなふて、縄かける人が恨めしいとはこのこと。久離切つた親子なれば、良からふが悪からふが、構はぬこととは思

へども、大坂へ養子に行て、利発で器用で身をもつて、身代もよふ仕上げた、あのやうな子を勘当した親は大きなたはけ者と、指差しられ笑はれたら、その嬉しさはどふあらふ。今にもつい捜し出され、縄かゝつて引かるゝ時、孫右衛門は目水晶。よふ勘当したでかしたと、誉められるのがおりや悲しい、誉められるのが悲しうござるはい。ア、それを思へば一日も早ふ往生お救ひと、拝み願ふは今参る如来様御開山。コレ、マ仏に嘘がつかれるか」

と、どふどひれ伏し悶え泣き。梅川も声を上げ、忠兵衛は障子より、手先を出し伏拝み、身をもみ歎くぞ道理なり。

涙の隙に巾着より、金一包取り出し、

「これは京の御本寺様へ、上げふと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない。たゞいまのお礼のため。これを

路銀にちつとなど、遠い所へ行て下され」

と、渡せば、梅川押したゞき

「お心づいたこのお金、逆様ながら戴きます。大坂を立ち退いても、わたしが姿目に立てば、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日あまりに四十両使ひ果して二歩残る。金ゆゑ大事の忠兵衛様、科人にしたもわたしから、さぞ憎からふお腹も立たふが、因果づくと諦めて、お赦しなされて下さりませ。親子は一世の縁とやら、この世の別れにたつた一目、逢ふて進せて下さんせ」

と、奥の障子を開るを引止め、

「ア、コレやくたいもない／＼。たつた今も云ふとほり、たとへ詞は交さいでも、顔見合はしたりや縄かけけるか、おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立たぬ。なんぼ義理が立てたいとて、親の手づからどふ縄がかけら

れふぞ、どふ縄がかけられふぞいの」

「御尤もでござります。そんなら顔を見ぬように」

と、傍にあり合ふ手拭取り、泣く／＼後に立廻り、

「慮外ながら」

と、めんない千鳥

「御不自由にはあらうが、かうさへすれば、傍にござつても構ひはあるまい」

「オ、忝なうござる。もの云はずと顔見すと、手先へなと触つたら、それが本望逢ふた心。親子一世の暇乞ひ。ガコレ必ずこなたの連合ひに、もの云はして下さるな」と悦ぶうちに忠兵衛は、嬉しさあまり駆出でて、親子手に手を取交ぜど、互に親ともわが子とも、云はず云はれぬ世の義理は、涙湧出る水上と、身も浮くばかりに泣きかこつ。

しんぱんうたざいもん

## 新版歌祭文

### 〔解説〕

安永九年（一七八〇）九月竹本座初演。作は近松半二（一七二八～一七八六）です。お染久松の心中を扱った「袂の白しぼり」（一七二二）や「染模様妹背門松」から登場人物、筋書き、有名な文句までもそのまま使った「お染久松物」の決定版で、上中下の三巻からなっています。中でも上の巻「野崎村の段」は度々上演され、段切りの旋律は多くの人に知られています。

### 〔野崎村の段 あらすじ〕

油屋の丁稚久松は、集金した金を贋金とすり替えられ、野崎村の養父久作の元へ返されています。久作は重病で盲目となった後妻、そしてその連れ子のお光と暮らしていますが、ゆくゆくは久松とお光を夫婦にしようと思っていました。久松が戻ったので、祝言をあげさせようとお光に支度をさせているところへ、かねてから久松と恋仲の油屋の娘お染が、跡を追って訪ねてきます。心中をも覚悟する二人に久作は意見して、別れることを納得させますが、お光は二人の気持ち揺るがないと悟り、自分が尼僧になることで、二人を一緒にさせようとしています。その様子を外で聞いていた油屋の後家は、前に久作が手代の小助に渡した金を尼への布施として差し出します。世間を憚り、久松は駕籠、油屋母娘は舟で大坂へと戻っていくのでした。

## 野崎村の段

納戸へ連れて行く。その間おそしと駆入るお染。

「逢ひたかつた」

と久松にすがりつけば、

「ア、コレ声が高ふござります。思ひがけないここへはどうして、訳を聞かして聞かして」

と問はれてやう／＼顔を上げ、

「訳はそちに覚えがあらう。わしが事は思ひ切り、山家屋へ嫁入りせいと、残しておきやつたコレこの文。そなたは思ひ切る気でも、私やなんほでもえ切らぬ。あんまり逢ひたさ懷しき。勿体ない事ながら、観音様をかくつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ。二人一緒に添はうなら、ままも炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の

道を背けとは、聞へぬわいの胸欲」

と恨みのたけを夕禪の、振りの袂に北時雨、晴間はさるになかりけり。

始終後に立聞く親。

「その思案悪からう」

と、言われて『はつ』と久松、お染。騒ぐを押へて、

「ア、大事な大事な。マア／＼下にゐや下にゐや。

ハテマア下にゐやいの。ア、因縁とは言ひながら、和泉の国石津の御家中、相良丈太夫様といふれこさの息子殿、いささかの事で家が潰れてから、わが身の乳母はおれが妹、その縁で十の年まで、育て上げたこの久作は後の親、草深い在所に置こふより、智恵付けのため油屋へ丁稚奉公。それほどまでに成人して商売の道読み書きまで、人並になつたはコリヤコレ親方の大恩。若い水の出端には、そこらの義理もへちまの皮と投げやつて、こなさんとい

つまでも、添ひ遂げられるにしながら、戸は立てられ

ぬ世上の口ぢやわい。エ、あの久松めは辛抱した女房嫌

うて、身上のよい油屋の婿になつたは、アリヤアレ、栄

耀がしたさぢや皆慾ぢや。人の皮着た畜生めと、在所は

勿論大坂中に指され、人交りがなりませうかいの。コ

レくくく、ここの道理を聞分けて、思ひ切つて下され。

コレ拝みますく、拝みますわいの。フムこれほどう

ても返事のないはコリヤ二人ながら不得心ぢやの」

「ア、勿体ない。実の親にも勝つた御恩、送らぬのみか

苦をかけるも、私が不所存から」

「イヤくそなたの科ではない。みんなこの身の徒らか

ら、親にも身にも代へまいと、思ひ詰めても世の中の義

理にはどうも代へられぬ。なるほど思ひ切りませう」

「オ、よう御合点なされました。私もふつつり思ひ切り、

おみつと祝言致しまする」

「そんならそなたも」

「お前も」

と互に目と、目に知らせ合ふ心の覚悟は、しら髪の親に。

「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」

「なんの嘘をもふしませふ」

「ム、娘御も今の詞に微塵も違ひはござりませぬか」

「久松の事はこれ限り、私や嫁入をするわいの」

「出来たくくく。ア、むくつけない親父めと腹も立てず、

よう聞き入れて下さりました。晩のまもしれぬ婆の命、

息のある内祝言が済んだと聞かして下さるが大きな善

根。善は急げぢや、今爰で盃さそ、おみつく」

と尻軽に立つて一ト間を差覗き、

「ハテ出ぐすみをしてをるわ。それでは果てぬ」

と手を取つて、

「サアく嫁の座へ直つたりく。一家一門着のままの

祝言に改まつた綿帽子、エ、うつとしかう取つてやろ」  
と脱がすはずみに、こゝがいきも抜けて惜しげもなげ島田、  
根よりふつと切髪を、見るに驚く久松、お染、久作呆  
れて、

「こりやどうぢや」

といふ口おさへて、

「コレもうし父様もお二人様も、なんにもいうて下さん  
すな。最前からなに事も残らず聞いてをりました。思ひ  
切つたといはしやんすは、義理に迫つた表向。底の心は  
お二人ながら死ぬる覚悟、ム、サ死ぬる覚悟でゐやしや  
んす、母様のアノ大病。どうぞ命が取りとめたさ。私や  
もうと思ひ切つた。ナ、サ切つて祝うた髪かたち、  
見て下さんせ」

と両肌を脱いだ下着は白無垢の、首にかけたる五条袈裟  
思ひ切つたる目の中に浮む涙は水晶の、玉より清き貞心

に、今更なんと詞さへ涙呑み込み、呑み込んでこたゆる  
つらさ久松、お染。久作も手を合せ、

「なんにもいはぬこの通りぢや、この通りぢや。女夫に  
したいばかりに、そこら辺りに心もつかず、蕾の花を  
散らして退けたは、みなおれが鈍なから、赦してくれ」  
も口のうち、聞へ憚る忍び泣き。

「ア、冥加ない事おつしやります。所詮望みは叶ふまい  
と思ひのほか祝言の、盃するやうになつて嬉しかつたは  
たつた半時。無理に私が添はうとすれば死なしやんすを  
知りながら、どう盃がなりませうぞいな」

四人の涙八ツの袖。榎並八ヶの落し水膝の、堤や越えぬ  
らん。久作涙押拭ひ、

「どうやらかうやら合点がいたさうな。さぞ母御様が案  
じてござらう。大事な娘御確かな者に」

「イヤそれにはおよびませぬ。母が確かに請取りました」

と言ひつつ這入れば、

「ヤア母様。ハア」

『はつ』とばかりに詞なく差俯向けば、

「コレお染。野崎参りしやつたと聞いてあんまり氣遣ひさ。イヤ氣慰みによからうと跡追うて来てなに事も残らず聞いた。夫婦の衆の親切、おみつ女郎の志。最前からあの表で、私や拝んでばかりゐましたわいなう。観音様の御利生で、怪我過ちのなかつた嬉しさ。これから直ぐにお礼参り。幸ひ私が乗つて来たあの駕籠でコレ久松。そなたは堤お染は船。別れ別れにゐぬるのが、世上の補ひ心の遠慮」

「さやうでござりまするとも。お志ぢや乗つてゐにや」

「娘は船へ」

と親、親の、詞に否も言ひ兼ねる、鴛鴦の片羽の片々に別れて二人は乗り移れば、

「兄様お健でお染様、もうおさらば」

と詞まで早や改まるおみつ尼。哀れをよそにみなれ棹「船にも積まれぬお主の御恩。親の恵の冥加ない取り分けておみつ様。かうなりくだるも前の世の定り事と諦めて、お年寄られた親達の介抱頼む」

といひさして泣く音伏籠の面ぶせ。船の中にも声上げて「よしないわしゆるおみつ様の、縁を切らしたお憎しみ堪忍して下さい」

「ア、わつけもないお染様。浮世離れた尼ぢやもの。そんな心を勿体ない。短氣起して下さいすな」

「才、娘がいふとほり、死んで花実咲かぬ梅、一本花にならぬやう、目出たい盛りを見せてくれ。随分達者で」

「ハイ、お前も御無事で」

「お袋様もお娘御もおさらば」

「さらば」



「ちらば」

「ちらば」

も遠ざかる船と、堤は隔たれど縁の引綱一筋に、思ひあ  
うたる恋中も義理の柵情のかせ杭、駕籠に比翼を、引き  
分くる心々ぞ世なりけり。